

ようこそ”知の交感地“へ

掛川

学び旅

エデュケーション・シヨナル・ツーリズム

東西の知が交わり、 地の知が宿ったまち。

日本の東西中心は東経138度。
その中心線が南北に走る静岡県掛川市は、
江戸時代から日本の東西の文化・経済・生活が
重なりながら切り替わっています。
東西を両睨み出来る独特の立地と、
異なる感性や知恵を持つ人びとの豊かな交り。
明治以後は、新しい経済思想である報徳運動を
地方に広める役割も担いました。
こうした地勢や背景が、
特有の寛容な気質を育み、ならではの知恵を生み、
個性ある技や空間を創り、
まちづくりに脈々と息づいています。

まちづくりを基軸に、
学びのテーマが広がる。



JR 掛川駅

JR掛川駅北口の木造駅舎
JR東海の耐震建替え工事計画に対し、木造駅舎の存続を要望した市と市民団体が増額分を寄付。外観を復元するがたちで2014年に耐震化が完了した。

工藤裕子先生と学生が

掛川で学んできた **ひと・もの・こと**

2004年から掛川に通う工藤ゼミの研修では、主に市政の現状と課題、生涯学習の理念を基に展開されてきたまちづくり、地域課題などを学んでいます。毎回異なる研究テーマに応じて、その都度取り上げられる学びの資源と人材により安定的に刺激ある学びが経験できています。

テーマ

生涯学習、まちづくり、公共政策、環境、観光交流、農林業、産業、中山間地、互産互消、健康福祉、文化スポーツ

場所・施設

- 市役所庁舎 ●環境資源ギャラリー ●JR掛川駅木造駅舎 ●大日本報徳社
- 世界農業遺産静岡の茶草場農法 実践地 ●東山いっぶく処
- 原泉地域立さくら咲く学校 ●ならここの里 ●掛川市森林組合 ●これっしか処
- 資生堂企業資料館 ●掛川市立中央図書館
- キウイフルーツカントリーJapan ●ヤマハ掛川工場(ピアノ工場)

★建築と空間

中心市街地と掛川城境界について座学の後、小グループに分かれて建築家や地元住民と解説付きでまち歩き。空間設計、歴史、建造物などについて説明を受けながら巡り、地域課題や必要な施策を探る。



★環境資源ギャラリー

「環境と資源に関わる生涯学習施設にする」という設立ビジョンを掲げ、2005年にオープンしたごみ処理施設。施設見学と座学を通じて、ごみ処理の実情とギャラリーの役割・機能について考える。



★生涯学習、まちづくり、公共政策

1979年に全国に先駆けて「生涯学習都市宣言」を行って以来、市民・行政が一体となって進めてきた「生涯学習のまちづくり」とはどのようなものか。市民と行政の両サイドから多面的なレクチャーを受けて成果と影響、課題を考察。

★中山間地のコミュニティとさくら咲く学校の挑戦+森林インストラクション

廃校跡地から生まれ変わった原泉地域立さくら咲く学校。中山間地のこの施設に宿泊し、地元住民からさくら咲く学校の成り立ち、現状についてレクチャーを受けながら交流。また、森林インストラクターと中山間地を歩きながら森林および林業について学び、地元の環境、経済について理解の深化を図る。

★レクチャー シリーズ ※市民・市職員を講師とする座学タイトルの一例

- 「生涯学習運動とまちづくり/行政と市民の関係」
- 「市政の現状と展望」(福祉/文化/教育/危機管理/スポーツ/観光/産業/農業ほか)
- 「地域資源の活用と商品化・交流型ツーリズム・互産互消活動」
- 「地域新電力の設立～市民の積極活用」
- 「観光資源の顕在化と交流型ツーリズム」
- 「森林および林業の現状とこれから」
- 「中山間地のコミュニティとさくら咲く学校の試み」
- 「ローカルライフスタイルの顕在化」
- 「地域活動の実際と事例報告」
- 「ソーシャルメディアの活用～掛川市の魅力づくり」



これから研究対象を決める学生にとって、中規模都市の市政の現状や掛川独特の哲学に触れられる機会は有意義です



なぜ私たちは学生と掛川を訪れ続けているのか



掛川を訪れる意義は大きく分けて4つほどあります。

ひとつめは、掛川の持つ「普遍性」。「観光だったら京都」のように、視察や研修では「ベスト・プラクティス」と呼ばれるところに行くのが一般的ですが、突出した所に行っても参考にならない場合があります。掛川市はいろいろな意味で「普通」の地方自治体。平成の大合併で性格の異なる市町が合併したことで様々な問題を抱えることになりました。そういった背景がどこにでも転がっているような実例であり、学生が勉強するうえで、また「平均的なまちで何ができるのか」を考えるうえで参考になります。

2つ目は、掛川の特徴。榛村純一元市長の主導により全国に先駆けて生涯学習都市宣言をした掛川市は、その帰着点を高齢者大学ではなく、まちづくりの人材を育てるという哲学で進められてきました。市民を育てることに注力してきたことが全国的に見て独創的な点。市民として「何ができるのか」「どのように巻き込まれ、また周囲を巻き込んでいくのか」を考えるきっかけとして価値があります。

3つ目は、受け入れ体制。市民活動の方々が中心となつて研修を受け入れて下さる点です。市民が行政側を巻き込んだ形の対応は他では無い事例です。視察対応がひとつの仕事と化している自治体も見受けられる中で、そうではない掛川の姿は刺激になると考えています。4つ目は、物理的な丁度よさ。



移動距離、手段、時間的にも東京から行きやすく、コンパクトなサイズ感も良いです。引率者としては学生の安全は重要です。掛川の規模感だと始めから終わりまでの一連の動線を明確にでき、目の届く範囲で様々なアクティビティを展開できるのです。

毎回少しずつ研修テーマが変化する中で、その時々々の市政、市民、関係団体などが提供する掛川の学びの資源やテーマは枚挙にいとまがないですが、大學生の研修を組む教員の視点としては主にこの4つが掛川を選ぶ大きな理由となっています。

ゼミでは、実習後に、「特定した課題の解決策を考える」という政策提言をしています。学生発表会には市議会議員が東京に来てくれたり、発表会の動画を掛川市役所職員と共有したりもしています。このような繋がりがもてることも魅力のひとつだと思います。



工藤 裕子

中央大学 法学部教授

専門は行政学、特に公共経営論と公共政策学。2004年から掛川市を学びの場として公共政策を学ぶ学生たちのフィールドワークを実施。以降、10数年間にわたり掛川市職員と市民が中心となつて講師・ガイドを担う学びの旅に來掛している。

鉄矢悦朗先生と学生が

掛川で学んできた **ひと・もの・こと**

鉄矢先生と学生の「アートプロジェクト共育」活動は2004年から続いています。掛川に通いながら「きっと掛川は、もっと面白い」と好奇心を満たすべく、地域と人に関わっています。2010年には遠州デザイン文化研修(3泊4日)を実施しました。

テーマ

まちづくり、住民参加、文化芸術活動、企業活動、歴史と文化、観光交流、農業、木の文化、自然、ものづくり、報徳の教え

場所・施設

- 掛川市中心市街地 ●竹の丸 ●大日本報徳社
- 掛川城・御殿・二の丸茶室 ●キウイフルーツカントリーJapan
- 世界農業遺産静岡の茶草場農法 実践地
- ねむの木こども美術館 ●資生堂企業資料館・アートハウス
- 掛川ステンドグラス美術館 ●五明の丘など

★掛川城 天守閣・御殿

市民の寄付を主な資金として1994年に本格木造で蘇った天守閣と、現存城郭御殿として京都の二条城など数力所しかない国指定文化財の御殿。根底に報徳精神が流れる寄付文化、歴史、建築技術、空間、木の文化など多面的な学びに触れる。



★資生堂企業資料館・アートハウス

「美しい生活文化の創造」を理念とする資生堂の企業文化を伝える企業資料館と本社所有のすぐれた美術品を一般公開するアートハウス。企業文化、本物の価値、アートの持つ力について考える。



★ヤマハ掛川ピアノ工場・ハーモニープラザ見学

グランドピアノの製造工場。機械化された製造工程にも職人の手と耳が不可欠なものづくりの現場を見学。



★アートによるまちづくり事業

掛川ひかりのオブジェ展、夏休み親子工作教室、国民文化祭など市民参加型の「アートプロジェクト共育」を通じて市民、地域と交流。



学びの素材は
まだまだたくさん。
本気のものづくりの現場に
もっと足を運びたい
ですね



★レクチャー シリーズ

※市民・市職員を講師とする座学タイトルの一例

- 「きっと掛川は、もっと面白い」
- 「運動、市民活動、素材を活かした交流型ツーリズムについて」
- 「人生観が変わる体験」
- 「企業がなすべきこと、教育がなすべきこと」
- 「障がい者と共生すること、教育に求めること」



私は「あそびは最高の学び」というフレーズをよく使います。掛川には山も川も海もあるから「遊べる」学べる」なあ、と考えます。川で遊べば、護岸工事にも「なぜ」、地域の人から「小枝が流れてきたらまもなく増水して危ないからな」と言われると「なぜ」が生まれ、学びが始まります。遊びの中には学びがいっぱいあるのです。そんな機会を与えてくれる「場」と「人」が揃っていることが、掛川に通う大きな理由でしょう。

教員養成大学の立場から掛川が好ましいと感じるひとつは、ひかりのオブジェ展や親子工作教室で、市の職員も市民も立場に関係なくみんなで準備から同じように関わっていることです。この場を経験していれば、「土日がフリーなら地域の活動に参加する」という感覚を持った教員になれると思います。教員も市民という認識があれば、学校の教育現場も変わっていくような気がしています。

今の大学生は、親と先生以外の大人と接することなく大人になっていく傾向にあります。掛川に学生を連れて行くこと、ちょっと変わったおじさんや癖の強いおばさんなど様々な大人と混ざって共に何かを創り出す活動や、異年齢間コミュニケーションの機会に恵まれます。このまちではきちんとアイデアを出せば認めてもらえ、共に課題を解決していく、共に育む「共育」が成立しやすい風風がいつばい感じられる。そこが私にとっては非常に魅力的です。面白く感じています。

近頃の学生からは、問題に対して「どうやったら一番早く答えを導けるか」という最短距離



学びの場としての 掛川の価値とは

を求める質問が多いです。しかし、掛川での遊びを通じた学びのプロセスでは答えへの近道が求められることはありません。人間的に豊かになっていくことを学べているような教育効果を感じるとともに、自分で問題意識を持って課題発見ができるように思っています。自分の興味は何なのかということ、ゆとりのある時間と、ゆとりのある遊びの中で見つけているように感じます。

「掛川学び旅」に提案させてもらうなら、掛川市内に囲い込んだ学びではなく、市外にある貴重な資源も学び旅に推していく、推薦型スタイルがあっても良いかもしれませんね。



東京学芸大学 教育学部教授
美術分野 環境・ロダクトデザイン研究室
鉄矢悦朗

2004年から掛川ひかりのオブジェ展に関わる。以降、教育を学ぶ学生たちとともに繰り返し掛川に足を運び、夏休み親子工作教室を支援しながらオブジェ展に出品するという活動が続いている。2010年には遠州デザイン文化研修(3泊4日)を実施した。

西村宣彦先生と学生が

掛川で学んできた **ひと・もの・こと**

北海道を飛び出して気候風土や地域特性が大きく異なる掛川市を訪れた3泊4日の地域研修。座学(聞く)、見学(みる)、交流(話す)、実践(動く)を通じて、五感を刺激しながら、地域経済を支える産業、歴史文化を学び、現状と課題に触れる中で北海道との相違点と共通点を考えました。

テーマ

地域経済、互産互消、生涯学習、スローライフ、まちづくり、歴史文化、観光交流、企業活動、ものづくり、農林業、シティプロモーション

場所・施設

- 世界農業遺産静岡の茶草場農法 実践地 ●製茶工場
- 掛川城・二の丸茶室 ●掛川市中心市街地 ●市役所庁舎
- 遠州横須賀街道・商店街 ●大日本報徳社 ●原泉地域立さくら咲く学校
- ならここの里 ●ヤマハ掛川工場(ピアノ工場) ●資生堂企業資料館・アートハウス
- 天竜浜名湖鉄道 ●キウイフルーツカントリーJapan



★世界農業遺産 静岡の茶草場農法 実践地 + 製茶工場見学

茶畑から一杯の緑茶まで。2013年に世界農業遺産に認定された茶草場農法とはなにか。一面に広がる茶畑を訪れ、生物多様性の保全に寄与し、高品質な茶を生産するその農法と農文化、茶産業に触れる。

★遠州横須賀地区の生活文化・地域経済

2005年に合併した旧大須賀町・遠州横須賀地区。日本古来の調味料「さしすせそ」がすべて揃う昔ながらの町並みと暮らしの文化が色濃く残る城下町。歴史文化、地域経済について考えながら、地域の魅力や可能性を探る。

★互産互消の取り組み

掛川発の地方都市間交流「互産互消」。地域間交流を通じて新しい価値を創造する基本的な考え方を座学で学び、互産互消商品を扱う店舗を視察。また北海道と互産互生の取り組みを実践者するキウイフルーツ農園を訪問する。

★二宮金次郎と大日本報徳社

薪を背負った二宮金次郎(尊徳)が唱えた「至誠 勤労 分度 推譲」を基本とする報徳思想を実践して広める全国報徳社の本社。生涯学習やまちづくり、寄付文化にも影響をあたえている尊徳の教えに触れる。重要文化財指定の大講堂で講義を受ける。



★レクチャー シリーズ

- ※市民・市職員を講師とする 座学タイトルの一例
- 「生涯学習都市づくりの取組みの経過と今後」
- 「地域経済の概況(農林・商工)、産業振興(お茶振興)」
- 「市町村合併と行財政改革の取組みと課題」
- 「原泉地区とさくら咲く学校(廃校跡地活用)」
- 「スローライフ運動と互産互消活動について」
- 「生涯学習とまちづくり」



北海道と掛川市で「互産互消」という考え方に基づいた、地域間交流が行われているのを2017年頃に知りました。そこでは東京中心の短期的な利益を追い求めるシステムではない、地方と地方がつながり合うことで、人間的な経済や心豊かな暮らしを実現しようというビジョンとロマンが語られており、その背後に掛川市で長年培われていた生涯学習の実践があると知り、魅力を感じました。

静岡はわかっていても、掛川は聞いたことがないという学生も多かったですが、だからこそ先入観を持たずに学べたと思います。知らない町だけど、北海道にはない茶産業や茶畑の景観があり、製造業が集積し、報徳思想や生涯学習のまちづくり、遠州横須賀の町並みや祭りの文化など、地域のことを多面的に学ぶことができました。そして学生にとっては、「自分の知らないかった町でも、面白い取り組みが行われており、面白い人がいる」ということに気づく経験が、

大きいと感じました。東海道の掛川は、北海道とは気候も風土も歴史も全く違います。そうした地域に実際に足を運び、地域の経済・社会・文化に触れ、地域づくりの実践や考え方を学ぶことは、学生の視野を広げ、比較の眼を養い、問題意識を持つこともっと深く学ぼうと思うきっかけになります。



「学び」が実現することになります。地域側も、そうした大学の受け入れを、地域の交流人口/関係人口の拡大や、地域の魅力の向上や発信に活かしていきたいなら、まさに「学びの互産互消」となり、地域と大学の双方にとって意味のある取り組みになるのではないのでしょうか。

その後の人生を能動的に生きる糧になります。地域と大学が連携し、地域で学ぶという流れは、これは大学だけではなく、初等・中等教育も含めてですが、今後ますます重要になっていくと思います。それはただ地域に向いて地域を学ぶというだけでなく、地域の方々に協力をいただきたり、地域の課題を探ったり、地域の課題解決につながるような活動に取り組む中で、今求められている「主体的で対話的な深い学び」が実現することになります。



西村宣彦

北海学園大学経済学部地域経済学科教授
地方財政論を担当。掛川発の「互産互消」という地域間交流に着目し、地域経済を学ぶ学生たちと富士山静岡空港を利用して2017年に来掛。「東海道・掛川の経済・文化・歴史・人と互産互消の可能性」をテーマとする研修を掛川で実施。

緯度を超え、異なる 経済・文化を学ぶ価値とは



静岡大学の学生によるフィールドワークの様子



一面に広がる水田（とうもん）が実りの季節を迎える



2005年の1市2町の合併によって掛川市に遠州灘が加わった



かけがわまちなかウォークアブル社会実験のストリートテラスを視察

訪れつつ、学びつつある 掛川の魅力とは。

私は静岡文化芸術大学で都市・地域分野の授業を担当しています。フィールドでの活動を重視していますが、その理由は学生が行政の経営やまちづくりの実際を肌で感じられるからです。フィールドでは、担当行政、地元を良くしようと活動している住民や組織、協働する企業と接する機会に恵まれます。こうした学外の方とやり取りをする学生の姿には頼もしさを感じることが多いです。

掛川は全国で平均的といえる中規模の都市であり、その点での面白さ、醍醐味があります。都市的な要素に加えて山も海もあり、絶対的な観光施設など尖った部分が無い。無いという条件の中で、都市づくり、まちづくりの方向性を考えてみるという地の利があると思います。また、元市長の榛村純一さん牽引のもと、ユニークな都市政策がなされてきたと認識しています。フィールド活動では、ふたを開けてみて初めて分かること、思わぬ出会いや課題があります。掛川は、これからも頻繁に訪れて学びたい地ですし、学ぶに足る地であると確信しています。

農の営みが豊かなまちには、 豊かな可能性がある。

とうもんの里は、この地域の農村風景を守るという理念のもと活動しています。美しい田んぼや茶畑の風景は農業の営みと管理の賜物であり、自然との闘いの歴史、共生でもあります。

掛川には、学びの素材として山と海の両方があり、山里、海辺それぞれに適した農業があります。天候不順だったり農業者はどんな風に考えて対峙してきたのか、農業が生み出す生態系、生産活動に伴う環境影響、農地活用など、総合的に有意義な研究課題になります。農村ならではの食文化も提供できます。田舎って良いなと感じてもらえる要素が多分にある。さらに、いろいろな面で農村を支えるのに若人たちの力を必要としているということも感じてほしいです。

また、とうもんに来た学生さんには「人生至る所に「師」あり」ということを学んでいただけたらと考えています。ここには、天領だった江戸時代以前からそれぞれ綿々と引き継がれた人々の暮らし、知恵があります。歴史があり、継続性があるところは学ぶことが多いです。ただ、私たちが知っていることは、実はほんの僅かなのです。この僅かなことの先つちよを、繭の糸口から引き出して手繰り寄せような、そういう勉強ができると思います。学生が100人いれば、100本の糸が手繰り寄せられて形になっていくのではないのでしょうか。

期待する 知の地が ここにあった



静岡文化芸術大学
文化政策学部教授
藤井 康幸

掛川市から30km足らずの静岡文化芸術大学にて都市・地域の計画、まちづくりを学ぶゼミを担当。掛川にはこれまでに何度かフィールドワークの場として学生と一緒に訪れている。

しづか しづか 掛川へ

NPOとうもんの会 前理事長
名倉 光子

とうもんの会は、田園空間博物館とうもんの里総合案内所を拠点として地域の農村風景を守り、農業を取り巻く価値観を伝えるために活動している。2017年から静岡大学地域創造学環のフィールドワークを受け入れている。

ようこそ 掛川へ

学びの場面も 機会も、 素材も人材も 充ちている





地勢と気候を活かして多彩な農業が営まれる



農園には国内外からゲストが訪れて共に学び合う



収藏品の商品について解説する大木館長



アートハウスの設計は高宮眞介、谷口吉生両氏によるもの

企業が着目し、 立脚する掛川市の可能性。

資生堂は1975年に主力工場を掛川に設立しました。地の利が良く、新幹線から見るという条件に合致しており、行政のビジョンや市民性なども考慮した結果だと聞いています。以降、アートハウス、企業資料館を設立し、資生堂のビジネスとアート、カルチャーがつながる場を、ここ掛川に創りました。

掛川市は、高いレベルで「自然」「文化」「産業」がコンパクトに共存して理想的な地方文化都市を形成していると思います。これらを繋ぎ、支えている「市民」は礼節を重んじ、心を大切にすることが根付いています。東海道宿場町であり城下町でもあるこのまちには、お茶の文化、報徳思想の普及と実践を推進する大日本報徳社、歴史的な建造物群、4つの美術館など、バラエティーに富んだ素材があり、学生にとっては学びの宝庫、セレンディビティーに出会えるまちでしょう。

全国に先駆けて学ぶことの大切さを説いた「生涯学習都市宣言」のまちでもあり、学ぶ意欲が高く、学ぶべき人材も豊富です。企業資料館を訪れる学生には、企業文化、化粧文化を学んでもらい、なおかつ企業が存在する意味、働き方、組織の大切さといったことを、机上の理論ではなく、実学を学ぶ場として、ぜひ積極的に活用していただきたいと思っています。

学ぶに足るまち、 掛川の本質的価値。

私どもの農園では、「自然と人間との調和や関わり」「農業、農村のあり方・魅力や役割」そして「私たちの農業への考え方や育てた農産物」などを正しく伝えたいと考えていますが、学生を受け入れる最大の理由は、私たち自身がワクワクするからでもあります。

ある時期まで、「学び」というのは重たくて辛いモノのように感じていましたが、「生涯学習」という概念を知ってからは「それは何？」という問題意識を持つことこそが学びだと気づきました。例えば、お茶を飲むならば、「なぜお茶を飲むのか」「お茶を飲むことで何が得られるのか」と。そのようなことを、お茶の生産者も、消費者も、もう一歩進んで考えると、気づきに繋がります。新しい方向性やアイデアが生まれたりと「学び」は楽しいものになってきます。

これまで大学生たちが幾度となく足を運んでくれています。掛川市には大学がありません。大学の無いこの地域にとつて、学生が訪れてくれるというのは価値があると考えます。地域全体が学びの場、地域ぐるみで学びの機会となります。今後の人生選択において、「掛川学び旅」で出会った人とのつながりや交流、体験が何かのヒントになることを願っています。

学生が 社会人から 学ぶことの 大切さ



資生堂企業資料館館長

大木 敏行

資生堂企業資料館は150周年を迎える資生堂の歴史の中で生まれた商品や宣伝制作物などを展示公開している。2013年10月の赴任以来、大木館長自ら学生や来訪者にレクチャーと館内案内を通じて本物の価値、資生堂のヘリテージを伝えている。

ようこそ 掛川へ

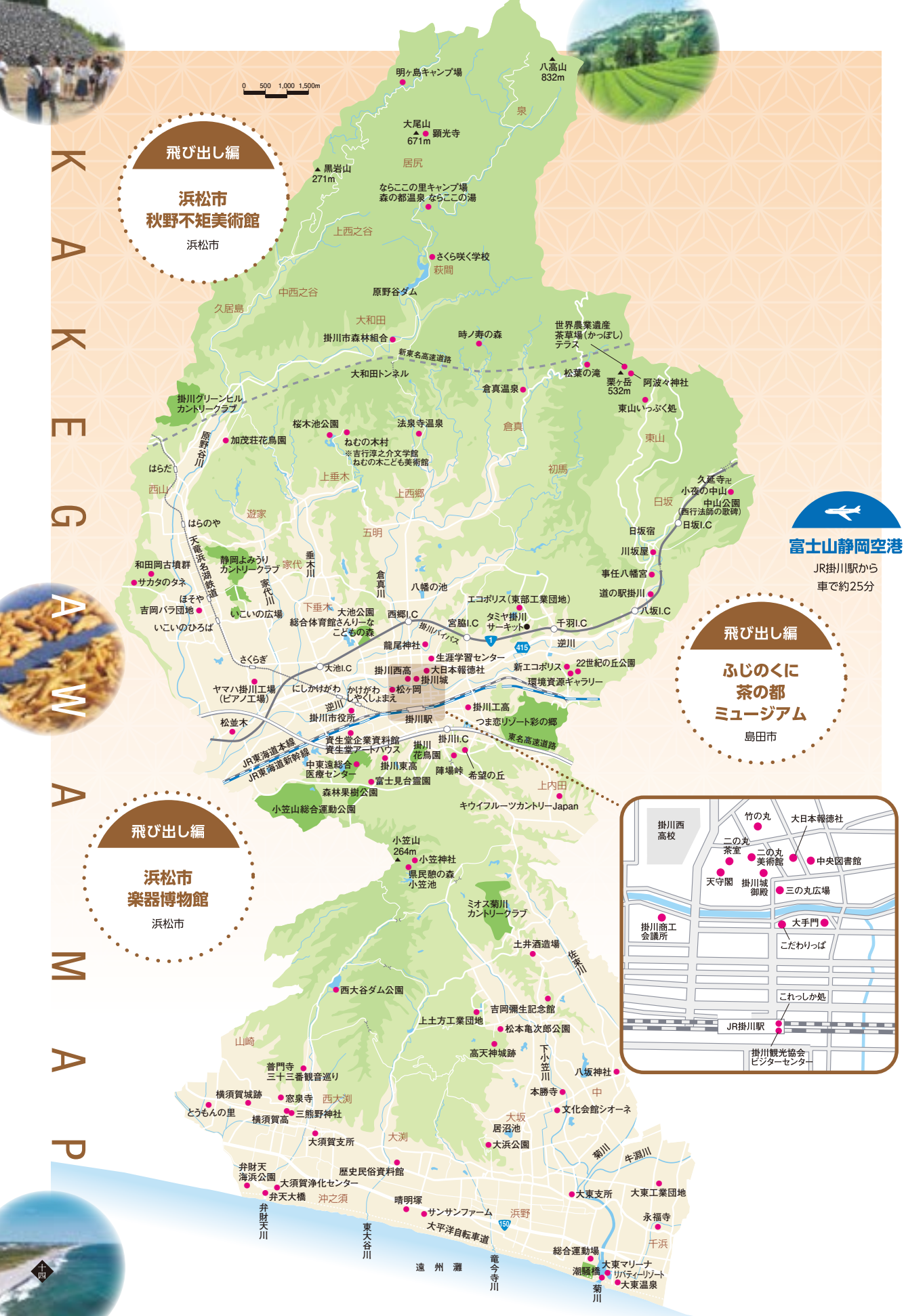
掛川観光協会 会長
キウイフルーツカントリーJapan 園長

平野 正俊

1990年に体験学習農園キウイフルーツカントリーJapanを開園。農業や自然を通じた学びの場を提供し、国内外の学生研修や交流事業を受け入れている。観光協会の会長としては2010年より積極的に交流型ツーリズムを推進している。



つながること、 つなげることが 人生の学び



飛び出し編
浜松市
秋野不矩美術館
浜松市

飛び出し編
ふじのくに
茶の都
ミュージアム
島田市

飛び出し編
浜松市
楽器博物館
浜松市

富士山静岡空港
JR掛川駅から
車で約25分



掛川 学び旅を、 ぜひご検討・ご相談ください！

掛川市でこれまで学んでいただいたテーマやまちの素質を、改めて「学びの資源・コンテンツ」として「学び旅」をプログラム化しました。教育機関や研究機関に向けてその価値を顕在化するために本冊子および動画を作成しましたので、どうぞ掛川市を「学びの対象地」として活用いただけますようご検討ください。

一般的な「観光の旅」とは少々次元が異なり、学びのための滞在、行政や企業や市民を交えた交流は訪れる側、迎える側の双方にとって恩恵があります。本冊子でご紹介した学びの素材のほか、掛川の持つ学びの資源を余すことなくご活用いただけますようサポートいたしますので、まずはご相談ください。

学び旅についてご相談

- | | |
|---|---|
| <p>具体的な研修のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎研修のテーマ、目的 ◎実施時期、実施期間、参加人数 ◎研修の成果として期待すること など | <p>研修へのリクエスト・相談</p> <ul style="list-style-type: none"> ●この分野の人から話を聞きたい ●民泊・農泊はできるか？ ●このテーマについて現場を見学したい など |
|---|---|

掛川 学び旅 相談/受け入れ窓口
掛川観光協会ビジターセンター 電話 0537-24-8711 FAX 0537-24-8701

- 研修における受け入れ協力体制**
(これまでの実績より)
- ◎公共団体・民間企業
掛川市、掛川観光協会、大日本報徳社、資生堂企業資料館、これっしか処、掛川市森林組合、キウイフルーツカンントリーJapan、かけがわ街づくり株式会社、互産互生機構など
 - ◎市民団体
ローカルライフスタイル研究会、掛川の現代美術研究会、掛川おかみさん会、掛川ひかりのオブジェ展実行委員会、生活と建築の研究会、掛川市林業研究会、原泉地域立さくら咲く学校、とうもんの会、遠州横須賀倶楽部、スローライフ掛川など

ご相談しながら研修プログラムを作成します
オーダーの内容整理 プログラム構成計画 スケジュール・分担調整 各種手配・準備

当日の運営アテンド + サポート

動画「掛川 学び旅」をどうぞご覧ください。



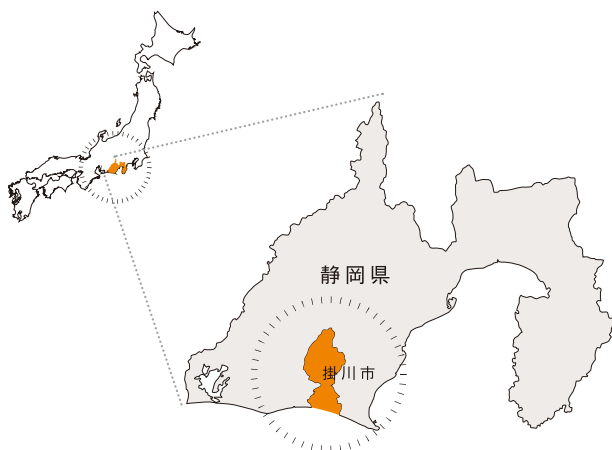
掛川「学び旅」インフォメーション

本冊子の内容および「学び旅」の動画をインターネット上でご覧いただけます。



かけがわ 学び旅

検索



掛川市へのアクセス

■JR東海道新幹線



■JR東海道本線



■名神・東名・新東名高速道路



■飛行機(富士山静岡空港)

- 新千歳～富士山静岡空港…約110分
- 鹿児島～富士山静岡空港…約95分
- 福岡～富士山静岡空港…約90分
- 熊本～富士山静岡空港…約100分
- 出雲～富士山静岡空港…約80分
- 那覇～富士山静岡空港…約135分

■富士山静岡空港←車で約25分→JR掛川駅

令和4年3月

掛川市・掛川観光協会

掛川市観光交流課

〒436-8650 静岡県掛川市長谷1-1-1

TEL. 0537-21-1121 FAX. 0537-21-1164

掛川観光協会ビジターセンター「旅のスイッチ」

〒436-0029 静岡県掛川市南1-1-1

JR掛川駅南口構内

TEL. 0537-24-8711 FAX. 0537-24-8701



この冊子は、令和3年度宝くじの助成金により作成しました。